広島逓信病院外来棟について

昭和10（1935）年11月竣工
当時は広島逓信診療所、昭和17年（1942）2月広島逓信病院と改称
鉄筋コンクリート造/2階建・一部3階建・地下1階
設計：山田守/施工者：坂本組

広島は、昭和20(1945)年8月6日午前8時15分、アメリカ軍による原子爆弾投下により被爆しました。そのため、広島逓信病院の職員は、職員48名中、5名死亡（うち1名が病院内で死亡）、25名軽傷という被害に遭いました。

しかし、昭和20年5月20日から同年7月7日までに入院患者全員の退院措置が取られていたため、入院患者の被害はありませんでした。また、被爆時に発生した爆風や火災により、医療器具類をほとんど失いましたが、多くの医師や看護師たちが被爆者たちの治療にあたりました。

平成7（1995）年8月1日、被爆50周年記念施策の一環として、中国郵政局が同病院を改修、資料室として公開をしました。同病棟の壁は白く塗り替えられていますが、その下には被爆当時に医療器具が壁に衝突した跡や焼け焦げた跡が残っています。

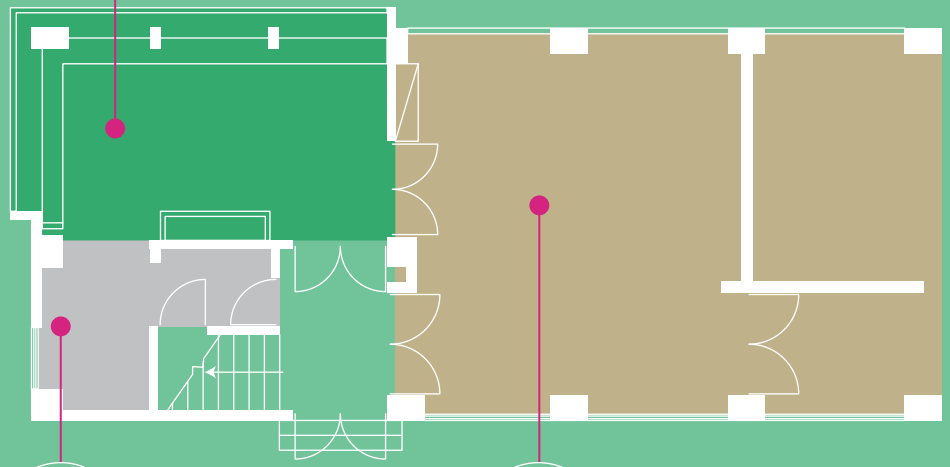
この建物に関する当時の資料や設備は、原爆によりことごとく失われてしまいました。また、正面玄関部分の棟も取り壊されてしまいましたが、この建物は、日本の建築史を代表する建築家の一人、山田守が初めて設計した病院（部分）として貴重な資料となっています。

蜂谷道彦 博士

当時広島逓信病院の院長であった蜂谷氏は、昭和20（1945）年に自宅で被爆し、重傷を負いながらも被爆者の治療を行いました。そして、昭和30（1955）年に自らの被爆体験と被爆者治療の様子を記した「ヒロシマ日記」の英語版が発行され、そのあと諸外国で翻訳されました。

旧手術室

当時、無菌手術室と呼ばれていた部屋です。外壁部分が全面ガラス張りとなっており、現在でも珍しい構造です。日光を多く取り込むことで、殺菌効果を狙ったものと考えられます。
緑色がかったタイルは、当時のものです。



旧消毒室

この部屋は、医療器具などの消毒作業が行われていた部屋です。
原爆により、消毒用の道具などは一切失われてしまいましたが、こちらのタイルも、手術室同様に当時からのタイルが残されています。

資料室

外科待合室、手術準備室、外科診察室、化膿性手術室があった場所です。四室を仕切っていた壁は無く、一つの大きな部屋となっています。
現在は、資料室として、パネルや資料がご覧になれます。